

ロメラレスはこれら（ペペに与えた資料）について質問はしなかった。（ここまで電話の内容）

“すぐに、このわずらわしいことに付いて電話があるだろう”とペペは考えた。

その時、実際に電話が鳴った。

—もしもし、ロメラレス 電話機を取るとペペは言った。

—なぜ私だと分かったのかね。 ロメラレスは驚いて尋ねた。

—マリアノ、私が優秀な探偵であることを忘れたのですか。

—初めに、マリアノと私を呼ばないでくれ。そう呼ばれることに我慢できない。二番目に、雑誌社・エントレビスタで言われた、君がオネトの死について調べていることを。

—殺人事件、そう言いたいのでしょうか。

—そう、オネストは殺された。もう分かっているだろう、ペペ。このような奇妙な殺人について知ったならば、すべて警察に知らせる義務がある。

—そのことって、何を言いたいのですか、ロメラレス？何故、警察はまだ、何も知らないのですか？

—私が言いたいことが大変はっきりしたように思われる。

たとえ警察が君より多くのことを知っていようとも、君は警察を助けなくてはならない、今迄に君が見つけたこと、それは有るかどうかわからないが、全てを説明して私達を助けなくてはならない。

—私は意見を持っている、ロメラレス、この事件付いて、貴方は手掛かりが立っていないようですね。

—私達はまた、けなし合いが始まった、このことを覚えておけよ。それは確約する。

★ ★ ★ ★